

令和7年度 文京区障害者地域自立支援協議会
第4回子ども支援専門部会

日時 令和7年12月15日（月）午後2時01分から午後3時40分まで

場所 文京シビックセンター3階 障害者会館AB会議室

<会議次第>

1 開会

2 議題

(1) 令和7年度子ども支援専門部会の振り返り

【資料第1号】

(2) 令和8年度子ども支援専門部会（案）について

(3) 全体会の発表について

3 その他

《参考資料》

・令和7年度 文京区障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会員名簿

<出席者>

向井 崇 部会長、勝間田 万喜 副部会長、萩野 美佐子 部会員、高山 陽介 部会員、
内田 千皓 部会員、高谷 通代 部会員、柿沼 真理子 部会員、田邊 裕子 部会員、
高橋 拓也 部会員、小野寺 素子 部会員

<欠席者>

高山 直樹 部会員、内海 裕美 部会員、塚本 了助 部会員、川崎 洋子 部会員、
加藤 たか子 部会員、井上 アヤ乃 部会員

<傍聴者>

1名

1 開会

本日の予定の説明等

2 議題

(1) 子ども支援専門部会令和7年度振り返り、令和8年度実施案について

資料第1号について事務局及び向井部会長から説明。以下質疑応答・意見交換

- ・来年度の夏の研修会では、放課後等デイサービスの実践報告と事例検討を行う。今年度の夏の研修会で、放課後等デイサービスの見学会を希望する意見があり、実践報告として動画で放課後等デイサービスの様子を映したいと思う。事例検討は学校と協働した事例を想定している。多様な教員、機関が関わる内容だが、学校との調整が済んでいないため、あくまで案として提示する。学校側が放課後等デイサービスの生の実践を知る機会になれば良い。

(次年度のテーマ・インクルーシブ教育について)

- ・インクルーシブ教育には特別支援学校のセンター的機能も関わるため、良いテーマかと思う。文京区は他区と比較したとき、放課後等デイサービスや育成室等に関する、就学前の施設からの問合せが特に多く、感度の高い方が集まっていると見受けられる。
- ・インクルーシブ教育には、手帳がなくとも社会的な関わりが多少苦手、あるいは診断が出ていなくても子どもに特性があると保護者が思っているケースも関わる。学校や保育園は、支援が必要な子もそうでない子もいる中で、まずどこに相談し、助けを求めたらいいのか、という点も含めて、具体的な事例が聞けるといい。その上で本人が過ごしやすくなるよう、複数の職種が連携して環境を整えることができればいい。
- ・多職種連携を行うにあたっては、働き方、人員確保の問題も同時進行で検討する必要がある。学校や福祉の業務が多様化・複雑化した後に連携の仕方が分かっても、各々の業務過多で実践的な連携には繋がらなくなるだろう。

(令和8年度 夏の研修会 放課後等デイサービスの実践について)

- ・多くの機関が携わることで切れ目が生じているため、それをどう解消していけるのかを考えられると良い。相談支援の視点では、1人に対して多様な支援が入っていることが俯瞰的に見える。一方で具体的に関わっている支援者は、全体が詳細に見えないと思う。まず学校と放課後等デイサービスの切り口から、1人に対して複数機関が繋がっていることの再認識

ができれば。

- ・リモートでの見学会は、学校側としても賛成。教員が放課後に直接見学に行く時間を作ることは難しい。反対に学校側を見学してもらおうとしたら、例えば5月から7月までの間、週限定で数人に絞り、学校を訪問できる取組をするのはどうか。
- ・文京区は私立の保育園の数がとても多く、地域ごとに特定の公立園と私立園で連携している。正に保育園でも、1週間オープンし合い、現場職員の交流ができるといいという話をしていたところ。1日だけピンポイントで決めるより、週限定とした方が動きが取りやすいと思う。
- ・教育センターも他機関との連携はあるが、機関ごとに関わり度合いの濃淡がある。さらに新任職員の育成としても、他機関の様子を知ることは大切。来年度は放課後等デイサービスを取り上げるとして、以降は別の機関、施設へ広げていく形にしてもいい。
- ・子どもたちは場所ごとに見せる顔が異なるため、訪問により、日常の雰囲気を知る機会は重要。研修会で直接話すだけでなく、話す相手の勤務環境を知る機会は、インクルーシブの実現に向けて重要だと思う。また若手教員の中には、放課後等デイサービスと学童の違いが分からない方もいる。
- ・学齢前を見学会があってもいい。幼稚園、保育園の先生が児童発達支援を見に来ることもある。反対に、児童発達支援にとって保育園の生活は分からない。保育園の多忙な実情を肌感覚で分かった上で連携できると、関係性はさらに深まると思う。
- ・見学会を開催するとして、いつでも来訪可とすると、裏目に出て来られないことが多いと思う。期間限定開催にするとして、いかに周知するかが課題。
- ・今年度の研修会によって、子どもたちの背景にある療育、教育、相談の場を知りたいという機運が高まったかと思うので、見学会は効果的だと考える。しかし訪問には課題も多くあり、各所に負荷がかからず、互いが見たいものを見に行ける仕組み作りが重要。試みとして仕組みを作って、勢いで実施することも一つの手かと思う。また訪問時に見た光景を、大きく誤解する見学者がいる可能性もある。仕組み作りの段階で意識し、各々の場における意図を確認して検討する必要がある。
- ・学校には各学年で様々な行事があり、それらと訪問が重複する可能性が高いため、見学の時期設定には難しさがある。また、見学後のフィードバックがなければ意味がない。双方の考え、仕事に対するリスペクトの部分を補完する仕組みが必要。例えば、福祉から学校への意見として「子どもをもっと待ってあげればいいのに」と言われることがあるが、学校としては次の授業や行事があり、学校全体の動きを思うと待ってあげたいけれど待てない、という

難しさがある。

- ・指導に込められた意図を知らずに「なぜこうしない」「自分ならこうする」という発想に至ることは、一番あってはならない。各々の視点を提示した上で見学できるといい。
- ・見学対象の絞り方、新人か管理者か、その選択も難しい。まだ歴の浅い教員や、最も誤解しやすいような現場の人にできれば見学してほしい。
- ・自身が以前参加した特別支援学校の見学会では、自由見学ではなく教員が同行し、例えば実習室における配慮等、具体的な説明があった。説明の教員を確保する苦労があると思う。
- ・学校内の見学の同行者も課題。公立の小・中学校に専任のコーディネーターはおらず、担任や学級の運営、養護教諭が兼任している。そのため見学会でコーディネーターを説明役にしようとしても、授業と重なる可能性が高い。合同の授業をやらせるわけにもいかない。かといって校長先生も難しい。
- ・事業所内の見学の同行者は、現場に入っている管理者がいるなら、担任が現場を回しながらでも見学を引き受けられる。しかし実際はそういう事業所ばかりでもない。
- ・見学会自体でのフィードバックが困難であれば、夏の研修会に紐づけるのはどうか。研修会の数週間にあたる7月上旬頃に学校を見学し、研修会でフィードバックできる時間を設ける。ただし7月上旬に限定されるため、訪問できる学校は限られる。
- ・見学会と研修会、両方の参加者を研修対象とすると、人数が限定されてしまう懸念があるが、試験的に一度行うことで実績を作り、よければ来年に広げても良いと思う。
- ・事前の見学会に未参加でも、夏の研修会へ参加し、その中で見学希望が出たら第二弾として、2学期の行事がない時期に見学会を行えると、研修会の対象者を限定する必要もない。
- ・見学会ではなく、研修会にて研究授業を動画で見せる方法もある。保護者の許可が必要な上、日常の光景が見せられない点、夏の研修会への職種別参加率は福祉より教員が多い点を鑑みて、効果は薄いと思う。
- ・インクルーシブ教育をテーマとするなら、多職種連携の視点で考えて、お互いの日常は見たほうがいと強く思う。学校の教室には支援からこぼれ落ちている子たちが何人もいて、それに教員が気づけないことがある。しかし教員に悪気はなく、クラス運営にとって一番いい形であるが故に生じる現象だと思う。それを福祉側が見学し、空気感を知ることが互いの協力に繋がり、インクルーシブへと繋がるかと。そのため、きれいな部分だけでなく、日常を誤解なく伝えられれば、有意義な研修会になると思う。
- ・8月研修会は夏休み期間の開催になるため、必然的に福祉の参加率が低く、福祉が学校側を

知る機会をカバーできない。教育センターの連絡会で、教員を講師として福祉側が知る機会
は設けられるか。

- ・教員の多忙さを考えると、教育センターの連絡会では、準備の必要もあるため難しい。また、
きれいな形の発表になると予想できるため、日常の部分は伝わりにくく、意図した効果は得
にくいだろう。
- ・見学会のニーズがあることは分かったが、学校側の実現が難しそう。仕組みさえ作れば定着
するかもしれないが、仕組み作り自体に時間を要するので、まず実現可能性のある福祉の訪
問を先行し、逆の訪問希望が自然と現場から上がってきたら、学校側でも実施していく形の
方が現実的かと思う。

(令和8年度 夏の研修会 流れについて)

- ・実践報告の後、関連して福祉と教育で協働した事例を発表し、子どもの見せる顔が場所ごと
に違うことを実際に見せられる機会になるかと。多くの事例検討では1か所からの発表しか
なく、多面的に子どもを見られる機会は少ないので、参加者にとっては興味深いのではない
かと思った。
- ・事例発表の後の流れに悩んでいる。事例発表後に小グループディスカッションに入るか、事
例発表者や学識経験者によるパネルディスカッションを入れるか。後者の意図としては、イ
ンクルーシブ教育には多様な理解や困難があるため、パネルディスカッションにより議論の
内容を整理できればいいと考えた。しかし小グループディスカッションの時間が短くなる懸
念があり、前者を採用して参加者同士で実際に話し合う時間を優先する考え方もある。どち
らが参加者にとって意味のある体験になるか。
- ・令和6年度の研修会では、小グループディスカッションの前に区内4か所の機関について説
明を行ったが、時間帯の影響もあり、眠たげな参加者も見られた。小グループディスカッシ
ョンを前に繰り上げた方が、頭がクリアになると思う。7年度の研修会もディスカッシ
ョンが盛り上がり、時間を押して話し合っていたグループもあったと感じるほどで、参加者は
話したいことが多くあるのだと思う。
- ・例えば実践報告20分にして、事例発表を30分とする。その後、休憩の前にアイスブレイク程
度のグループワークを入れて目を覚ます案はどうか。休憩で名刺交換を挟み、パネルディス
カッションへ移る。学識経験者や、事例の関係者からの話は一番大切だと思う。
- ・アンケートを集める時間も確保したい。今回の次年度方針決定も、アンケート結果に基づい

ていたのです。

- ・夏の研修会には教育側の参加が多いことを前提にすると、放課後等デイサービスの説明が実践報告内で必要かと思う。また報告を行う放課後等デイサービスがどのくらい典型的、または非典型的なのか、放課後等デイサービスとは他の機関とどういう関係にあるのか、紹介が必要ではないか。
- ・利用者数、どういう利用者が使っているか等の背景の説明があると良い。今年度の研修会でも説明した事項ではあるが、スライド1枚程度で説明がほしい。
- ・教員の中には、子どもが困っているなら取りあえず放課後等デイサービスに行ったほうがいいと思っている方、または育成室と混同している方もいる。誤解のないよう説明は必要。
- ・制度的な話や、学童との違いも含めて、放課後等デイサービスについて説明した後、放課後等デイサービスと学校で連携して進んでいった事例を報告し、改めてインクルーシブ教育の中で機関同士がどう連携していき、子どもの発達をどう保障していくかという点を、一緒に考えていけるといいかと思う。

以上